

# 宇津木妙子氏に聞く

(NPO 法人 ソフトボール・ドリーム理事長)

## 私の「フェアプレイ」論

取材・構成／編集部



今年、還暦を迎えられた宇津木氏。しかしながら、その“意気”やますます“軒昂”だ。現在は、NPO 法人 ソフトボール・ドリーム理事長として、ソフトボールの普及活動に尽力されているほか、東京国際大学の特任教授として教鞭を執るなど、八面六臂の活躍だ。長きにわたり、トップアスリーの指導現場に身を置いた宇津木氏のフェアプレイ論とは…。

### 他者を思いやる心

——2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致が決まった一方で、20年大会での実施競技復帰を目指していた野球とソフトボール（統合し、世界野球ソフトボール連盟〈WBSC〉を設立）でしたが、残念な結果に終わってしまいました。

宇津木 最後まで可能性を信じていましたが、落選となってしまいました。実は、もしソフトボールが復活することに決まったら、ほかの落選した競技の関係者にどう声を掛けたいかと、発表の瞬間まで悩んでいたくらいです。

——自分たちさえよければいいという考え方に対して、次第に違和感を覚えなくなりつつある状況にあって、宇津木さんのように、他者を思いやる心がこうして残っていることに、不思議な安堵感を覚えます。おそらく、フェアプレイの精神が放つオーラのようなものなのかもしれませんね。

宇津木 今さらいうまでもなく、勝負には勝ちと負けがあります。もちろん、勝負というのは、スポーツにおける試合にのみ限ったことではありません。今回のように、オリンピックの復活を懸ける勝負もあります。試合に限らず、どんな戦いにおいても、勝てばうれしいし、負ければ悔しいものです。ただし、勝者はその喜びの感情を、どういう場面で、どう表現するか…。ここを見誤ってしまうと、時として敗者を傷つけてしまうことになりかねません。

——しかしながら、実際には、敗者に対する思いやりが欠けているのではないかと、疑問に思わざるを得ない場面に出くわすことが少なくありません。

宇津木 私が監督を務めていた、1997年の日立高崎は、今振り返ってみると、まさに最強と自負できるチームでした。このとき、私は選手にこう言ったことを今でもよく覚えています。「優勝しても、相手の立場を考えてはしゃいだり大喜びしたりするのは控えよう。

喜びは、祝勝会など相手のいないところで分かち合おう」と。当時は、勝って当たり前前のチームだったからこそ、そう言わせたのかもしれない。

——まさに、王者としての懐の深さですね。

### 反省の繰り返し

宇津木 一方で、素直に喜びを表現するのは当たり前で、むしろ、感情を押し殺すのは偏屈ではないのか、と訝る方もあるかもしれません。しかし、普段からそういう気持ちを肝に銘じながら取り組むのと、そうでないのとでは、そもそもその話として、フェアプレイに対する意識は磨かれていかないのではないのでしょうか。

——そういう心がけこそが、フェアプレイの礎になっているということですね。ところが、実際には、勝敗に拘泥してしまって、そこまではなかなか気が回っていないのが現実ではないかと。

宇津木 確かにその通りです。私

自身も、試合に没入してしまうと、  
ついつい初心を忘れてしまうこと  
があります。人間ですからね、な  
かなか聖人君子のようなわけには  
いきません。しかながら、普段か  
ら心がけていれば、必ずそこには  
反省が生まれます。

——反省があるからこそ、心が磨  
かれていくということですね。そ  
して、それが人間的な成長にも結  
びついていくということでしょう。

宇津木 人生というのは、常に反  
省の繰り返しだと思います。とこ  
ろが、人間というのは“喉元過ぎ  
れば熱さ忘れる”で、ついつい苦  
しい経験も、過ぎ去ってしまえば  
その苦しさを忘れてしまうもの  
…。フェアプレイに対する取り組  
みも同様ではないでしょうか。い  
くらカッコいい言葉で取り繕って  
も、実践が伴わなければ、“絵に  
かいた餅”でしかないし、あるい  
はもしかすると、本音と建て前と  
を使い分けているのかもしれない。  
時と場合、あるいは相手に応  
じて本音と建て前とを使い分けて  
いるケースは論外として、常に本  
音というケースもあります。

例えば、普段から、フェアプレ  
イの大切さを唱えつつ、いざ試合  
本番になると、「勝ちたかったら、  
相手を突き飛ばしてでも1点を奪  
ってこい」という内容の表現を指  
導者の口からよく聞きます。果た  
して、それはフェアかというと、  
そうではありません。しかし、一  
方で勝負の厳しさを表す言葉でも  
ある。そう考えると、指導現場に  
は矛盾に感じるのが渦巻いてい  
るということになります。いい換  
えれば、指導者は常に矛盾を抱え  
ながら指導に当たらなければなら  
ないという課題を、突きつけられ  
ているということでしょう。では、  
選手は一体、何を信じればいいのか、  
ということになってしまいます。

——そういう意味では、スポーツ  
は常に“両刃の剣”という問題を



#### うつぎ・たえこ

1953年4月6日生まれ。埼玉県出身。星野女子高（現星野高）卒業後、ユニチカ垂井（岐阜）で14年間プレー。86年から日立高崎（現ルネサスエレクトロニクス高崎）監督を務め、日本女子1部リーグ、全日総合選手権に各4度優勝。日本代表監督として2000年シドニー五輪銀メダル、04年アテネ五輪銅メダルを獲得した。現在は日本ソフトボール協会常務理事・国際委員長。東京国際大学特任教授。11年、NPO法人ソフトボール・ドリームを設立。世界を視野に入れたソフトボール普及に力を入れている。

抱えながら歩んでいる、といえる  
かもしれませんね。

#### 「徹底的に向き合う」 からこそ！

宇津木 だからこそ、指導者は選  
手と徹底的に向き合う必要がある  
のではないのでしょうか。私自身  
も、常に選手と向き合うことを心  
がけてきました。信頼関係は、見  
て見ぬ振りからは生まれませんか  
らね。昨今、社会問題となっている  
“体罰”に関しても、指導者と  
選手が真剣に向き合っていなかつ  
たからこそ、ここまで大きな問題

になったのではないのでしょうか。  
この体罰問題に関しては、かつて  
の私自身を振り返ってみたとき、  
反省すべき点があることは事実で  
す。もちろん、体罰を肯定するも  
のではありません。ただ明らかに  
暴力的な部分だけが先鋭的に取り  
上げられ、それがさもスポーツ界  
すべてに共通する現実であるかの  
ように捉えられることには、若干、  
疑問を感じています。それは、“木  
を見て森を見ず”ではないか、と。

この問題が大きく報道されたとき、  
上野（由岐子／ルネサス高崎）  
に、どう思う？ と尋ねてみた





全日本代表監督時代のワンショット(写真は、アテネ・オリンピック直前のイタリア合宿)

ころ、彼女はこう言いました。「監督、それは受ける側がどう思うかですね。そして、指導者がどれだけ選手のことを理解できているかどうか。そこが一番大事だと思います」と。

——それが徹底的に向き合うということですね。

宇津木 そう。例えば、子どもたちに「ボールはこうやってキャッチするんだよ」と指導したときに、すぐにできる子とできない子がいます。そこで、できない子に対しては、「じゃ、こういう方法でやってみよう」とアドバイスし、それでもできなかつたら「こういう方法ではどうかな?」と、二の矢、三の矢…と、根気強く提供していくのが指導者の役割です。果たして、自らの指導を振り返ったとき、その矢は一体、何本用意されているか、さらには正しい方向に放たれているか(導いているか)までをも、しっかりと認識していなければならないと思います。徹底的に向き合うとは、そういうことではないでしょう。

——いい換えれば、向き合おうとせず、途中でそっぽを向いてしまう(放り出してしまふ)人は、指導者としてまだまだ未熟ということかもしれませんね。そう考えると、体罰とは、指導者自らの未熟さを露呈した状況といえるかもしれません。

宇津木 諦めるのは簡単。そういう意味では、指導者には不屈の忍耐力が必要といえるでしょうね。一方で、今般の体罰問題で気になったのは、いわゆる一部のコメントーターといわれる第三者の人たち。彼らは、自分のことはさておいて理想論ばかり語っているということです。あなたは、指導者と選手との関わり合いについて、果たしてどこまで知っているのか、と逆に聞きたいですね。

例えば、女子のスポーツの世界では、セクハラ、パワハラは今に始まったことではありません。指導現場では昔からずっといわれ続けていたことで、それは暗黙の了解として捉えられていた感があります。しかしながら、当時は誰もその問題に触れようとはしませんでした。ところが、今回の報道を皮切りに、まるで鬼の首でも取ったかのように、彼らは声高に叫び続けている。私にしてみれば、なにを今さらという思いであり、それまで見て見ぬ振りをしてきたあなたたちこそフェアではないのではないか、と言いたいですね。そんな人に体罰問題、あるいはフェアプレイを語る資格はないと思っています。

——まるで、後出しじゃんけんみたいなもの…。

宇津木 その通りです。私は、何事もストレートに物申すタイプな

ので、特に本音と建て前とを使い分けている人たちにとっては煙たい存在でしょう。常に本音ですから(笑)。でも、言うべきことは、これからも遠慮なく言っていきたいと思っています。ただ、これまで提言してきたことについて、1つ1つ検証したわけではありませんが、なかなか改善されている様子うかがえません。いや、はなから改善なんて、しようとは思っていないのかもしれませんが。なぜか。ほとんどの人たちが自分だけは大丈夫、無関係だと思っているからです。

例えば、車のスピード違反ばかり、です。捕まって初めて後悔し、反省をする。先に述べた通り、人間は“喉元過ぎれば熱さ忘れる”からでしょう。私たち人間は、ルールのなかで生きています。したがって、そのルールに違反すれば罰則を受けるのは当たり前。スポーツという枠組みのなかにおいても、それは同様です。

### より重要となる 指導者の役割

——体罰問題を抱えるスポーツ界ですが、一方でスポーツには清新なイメージがあり、それに取り組んでいる人であれば、フェアプレイ精神が自然に涵養かんようされると、高く評価されているところがあります。しかし、実際には個々の心がけ次第で、プラスにもマイナスにも作用する、ということですね。

宇津木 だからこそ、自己コントロールが大事。ただ、言うはやすく…で、これが難しい。例えば、レギュラー選手に、「レギュラー以外の選手の気持ちをわかってやれ」と言っても、実際にはなかなか理解できるものではありません。逆もまたしかり。すなわち、個々の心のもちよう、あるいは常識というものに対して、意識改革を促す作業は一朝一夕にはいかないということです。だからこそ、粘り強く向き合うことが大事にな

ってくるのです。

スポーツの世界は、すべてが“レギュラー”だけで構成されているわけではありません。誰もが頭では理解しているつもりでも、このところが、どうも抜け落ちているような気がしてならない。結局は、他人事。自分のことしか考えていない。つまり、それが人間の欲です。だからこそ、指導者の役割がより重要になってくるのではないのでしょうか。

——スポーツ本来の素晴らしさを生かすも殺すも、指導者次第ということですね。もっといえば、指導者次第で、スポーツによって培われるフェアプレイ精神は、普遍性をもってさらに輝きを増してくる、ということなのでしょう。

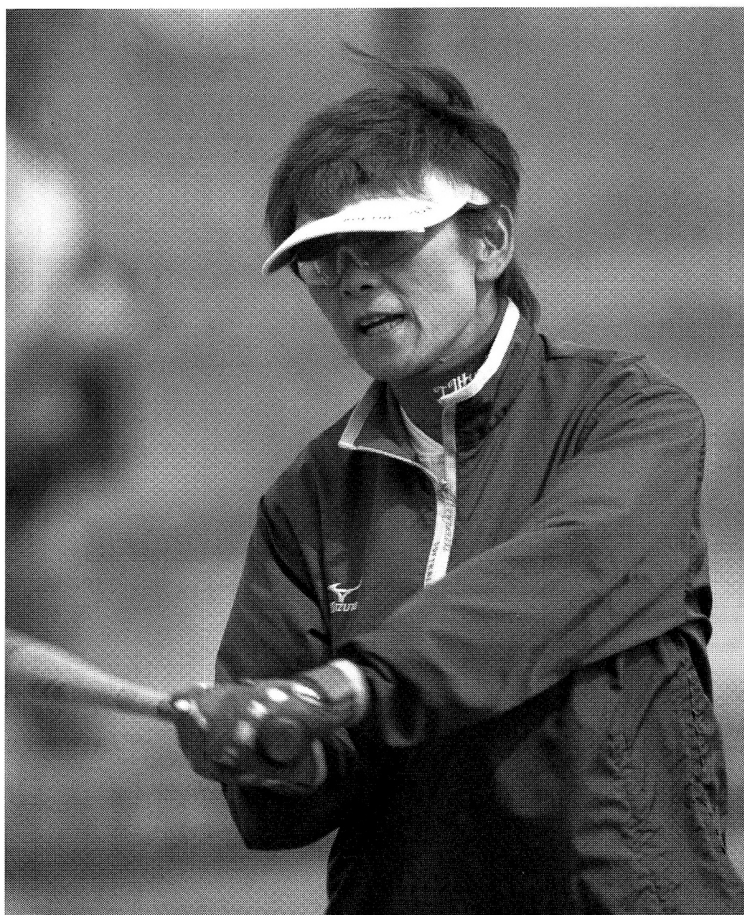
宇津木 そうでなければ意味がないし、それこそがまさにほかの分野にはない、スポーツの特性であり、スポーツだけがもつ潜在能力の高さといえるのではないのでしょうか。そこで、改めて自らを振り返ってみたとき、果たして私たち指導者は、スポーツが秘めている教育的価値を本当に生かし切っているのか、今さらながらに自戒してみる必要があるのではないのでしょうか。

### 子どもたちにとって アスリートは憧れの存在

——同時に、トップアスリートには、子どもたちに憧れられるような存在になってほしいですね。

宇津木 特にスポーツ選手の場合は、子どもたちにとって憧れの対象となりやすいものです。ところが、本来の自分はこういう性格なのに、周りからこういうふうに見られている。だから、期待に応えられるように振る舞わなければならない…と。さらにトップアスリートになると、栄光の日を境に、さらなるプレッシャーを抱えながら生きていくこととなります。しかし、私は、一流といわれる選手は、競技だけが一流ではなく、す

### 指導者は選手と徹底的に向き合う必要がある。



べてが一流でなければならないと思います。それが普遍性を伴ってくるということであり、当然、フェアプレイに対する考え方や行動にも反映されてくるはずで。子どもたちは、まずはまねから学ぶもの。そういう意味で、スポーツ選手には、競技だけでなく人間性も磨きながら、常に子どもたちにとっての憧れの存在であり続けてほしいですね。

——注目されているということは、それだけの責任感も生まれてくるでしょうし、自らを律しつつ、さらに人間性を向上させようというモチベーションにもなるものです。では、最後に子どもたちにフェアプレイをわかりやすく説いていただけますか。

宇津木 「フェアプレイ」という言葉は使っていませんが、ソフトボール教室でいつも話していることがあります。それは、「挨拶をしよう」「相手の目を見て話を聞こう」「大きな声で返事をしよう」

です。それらは、すべて相手を思いやる気持ちがベースになっています。要は、ここがフェアプレイへ続く道への第一歩だと思っています。

また、「ソフトボールはチームスポーツ。だから、助け合うことが大事。ただし、助け合うのはチームメイトだけではないんだよ。相手の選手が転んだりしたら、手を貸してあげようね」とも。そういうことって、普段から心がけていけば、自然に身に付いていくフェアプレイだと思います。

さらに、「ミスをした仲間を責めたり、悪口を言ったりするのはやめよう。誰もミスをしようと思っただけではない。もし、自分がミスをして、みんなからそう言われたら嫌でしょう。また、相手チームに対する野次もそうだよ」と。

フェアプレイとは、相手に対する思いやり。これに尽きると思います。